

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
すがぬま しんぞう 菅沼 新三	男性	94歳 H27.8.15 現在	24歳	湖西市

「中国戦線（山東省）で目にしたこと」

私は、昭和15年（1940年）12月3日に広島^{うじな}の宇品^{ほけんぐん}に集合、北支派遣軍自動車第26連隊第1中隊^{げんえきへい}の現役兵として入隊しました。その時の連隊の駐屯地^{ちゆうとんち}だった徐州^{じよしゆう}へ行き、そこで約3ヶ月の初年兵教育を受けました。その時、シヨツキングなできごとがありました。陸軍士官学校を卒業したばかりで見習士官として着任した20歳^{ちやくにん}そこそこの将校^{はたち}のことです。私たちは、昭和16年1月に発表されたばかりの戦陣訓^{せんじん}を覚えさせられました。ところが、そう簡単に覚えられるような内容^{ないよう}ではありません。ある時、その見習士官が私たち初年兵を前にして戦陣訓^{ひろう}を披露しようとしたところ、途中で詰まってしまったのです。私たちは、優秀な将校でも覚えられないんだとほっとした気持ちでいましたが、その見習士官は、何とピストルで自殺してしまったのです。そんな些細なことで、と思いましたが、軍律^{ぐんりつ}の厳しさを思い知らされたできごとでした。

終戦後は捕虜となり、帰還する昭和21年（1946）6月までの5年6ヶ月、中国に従軍していました。

26連隊は、第1中隊から第4中隊まであり、私は第1中隊にいました。中隊は、35人の6班編制^{ほんへんせい}でしたから180人ぐらいで組織^{そしき}されていました。中隊の任務^{にんむ}は、自動車^{りようまつ}で兵士や糧秣^{しよくりよう}（兵士用の食糧と軍馬用のまぐさのこと）を輸送^{ゆそう}することで、私はその車の整備や運転^{せいび}を任^{まか}されていました。私のいた26連隊は寄せ集め^よのようで、私の乗る車は43年式のトヨタでしたが、日産、フォード、シボレーなど、いろいろな車で編制^{へんせい}されていました。

私たちの連隊本部^{さいなん}は済南^{せいなん}にあったため、おもに山東省内で活動^{かどう}していました。昭和16年頃^{ごころ}の戦闘相手^{せんとう}は、八路軍^{はちろ}（中国共産党^{きやうさんとう}）でした。八路軍はゲリラ戦を得意とし、日本軍の輸送部隊や小部隊^{せうぶたい}に奇襲^{きしゆう}攻撃^{こうげき}をするので脅威^{きやうい}になっていました。その討伐^{とうばつ}のため、日本軍は密偵^{みつてい}を使った情報^{じようほう}収集^{しゆじゆう}を強化し、その情報を得て攻撃対象^{こうげきたいさう}が決められていました。敵の規模^{てききぼ}に



自動車部隊の徐州への行軍 昭和14年 提供:山本敏仁氏

合わせて、どこの部落を攻撃するか決めるのです。歩兵を自動車1台に10人から20人ぐらい乗せ、10台で出たり、5・6台で出たりしました。しかし、目的地はもぬけの殻ということも多かったです。

私のいた26連隊は寄せ集めのようで、私の乗る車は43年式のトヨタでしたが、日産、フォード、シボレーなど、いろいろな車で編制されていました。

○ 最前線に立つ歩兵隊

自動車部隊は歩兵を乗せて移動するのが役目で、到着すると歩兵は戦闘態勢に入り、自分たちは後方で待機することになります。歩兵隊は城砦でも民家でも、いつも攻撃の最前線へ立たされ、突撃もするわけですから、戦死者も負傷者も大ぜい出ます。

いつ頃のことか時期は忘れましたが、歩兵部隊と隣り合わせて夜営したことがあります。その時、歩兵隊の兵士が亡くなりました。(死因は知りません)同じ部隊の兵士が、親指だけを切って持ち帰るようにしていました。移動中なのでどうすることもできないようでした。遺体は、その地に埋めてしまいます。哀れなものです。自動車部隊は糧秣を常に持っていて、どこへ行っても悪いことはしなかったのですが、中国人も逃げ隠れするようなことはありませんでした。その点、私たちは恵まれていたと思います。中国人は部隊の印を見て分かるのか、警戒されるようなこともなく、女性も出てきましたが、顔に墨を塗っていたりしました。

○ 歩兵は略奪や虐殺をしたのか？

歩兵の場合、最前線に立ち、後方からの食糧の補給も間に合わないことがあるので、現地調達しか方法がなかったと思います。それが民家からの略奪になったのです。私は、歩兵による略奪の場面を見たわけではありませんが、部落へ着いた時には、民家が荒らされていて、満足な家はあまりなくなっていました。

燃やされた家は見なかったですが、壊された家は確かに見ました。その時にどんなことが行われたかは分かりません。略奪や強盗、強姦、虐殺があったかもしれません。しかし、それは部隊によっても違っていたと思います。兵隊は上官の命令がすべてですから。確かなことは、現地の住民は逃げるのに必死だったということです。

一つの部落の糧秣をすべて集めて、他の部落へ運んだことがあります。軍の作戦で、ある部落の食糧を奪ったと思いますが、その部落の人たちはどうなるのかと心配しました。運んだのはこうりゃんとか小麦でした。こういった作戦は夜



昭和十二年 松江の戦利品運搬 兵藤祐治氏提供

に行われ、ライトも点けずに一晩に2往復ぐらいしました。アメリカの戦闘機、グラマンによる攻撃を避けるためです。運搬作業は、中国人がやってくれました。日本軍に協力的な汪兆銘（南京国民政府）側について中国人だと思います。

昭和19年（1944）になってからのことです。気の毒な光景を目にしました。密偵が殺されたことがありました。情報が誤っていたのか原因は分かりませんが、その密偵は腹がパンパンにふくらむまで水を飲まされ、その後で銃殺にされたのです。拷問を加えたのは、戦友が何人も殺された恨みがあったのだと思います。こういった「やられたらやり返す」という負の連鎖は、戦争になれば必ず起きます。殺すか殺されるかの非日常の世界ですから、大なり小なり虐殺も行われます。軍服を着ず、農民にまぎれた敵がゲリラ戦を仕掛けたりだましたりするので、見せしめのために虐殺することもあると思います。

しかし、それが新たな負の連鎖となっていきます。それが戦争なのです。

○ 従軍慰安婦のこと

済南には、将校集会所など軍人が利用する施設があり、日本人の女子挺身隊もそこにいました。ある部隊が駐屯地を移動する時、荷物と一緒に朝鮮人女性を6人ぐらい乗せて運んだこともあります。それを監督しているのは日本人でした。

済南には日本人街がありました。済南の人たちからいただく慰問袋は、日本のものより質がよかったです。日本には物資がないことが、そんなところから分かりました。

○ 終戦後は捕虜に

終戦になったのは、河南省許昌でした。終戦になっても私たち自動車隊は帰れず、許昌から老河口という飛行場まで中国の兵隊を乗せて運びました。捕虜として都合よく使われたのです。それが、蒋介石の兵隊だったと思います。

その飛行場ではとんでもないものを見ました。なんと木で造った日の丸の飛行機があったのです。こんな飛行機で戦えるわけがないと思いました。

捕虜としての仕事は、大してありませんでした。時には麦畑の土寄せなど農家の仕事を手伝いをしましたが、決まった仕事はありませんでした。ただ、食べ物、キュウリが入ったすいとんが出る程度で、いつもお腹が空いていました。

○ 中国に残る兵士も

帰国直前に脱走した兵が一人いました。明日、汽車に乗るという話があったその晩に消えたのです。終戦後、中国人は日本の兵士に、日本に帰っても食べるものもないから中国に残れと誘うようになりました。歩兵の古参兵の中には、中国に残るとい人もいました。中国軍に残れば将校になれると言われ、実際拳銃をもらい受けていました。技術を持っていた日本人兵士は優遇されたのです。そんなこともありましたが、私たちは、昭和21年6月、やっと日本の地を踏むことができました。5年6ヶ月ぶりのことでした。